水晶の眼

高野敦志

目次

水晶の眼　1
あとがき　39

表紙
葛飾北斎「五百らかん寺さゞゐどう」

水晶の眼

少し前まで江戸と呼ばれていた町が、夜明けの時を迎えていた。広重が『名所江戸百景』で描いた情趣ある町並みも、東京と名を改められた頃から、そこかしこが蝕まれていった。築地（つきじ）から横浜まで電話が引かれ、電柱をつなぐ電線が大空を遮った。浜御殿の西北にあるステーションからは、海の上に土手が築かれて、朝日を浴びた石垣の上を、今日も煙（けむ）を吐く陸蒸気（おかじょうき）が走ることになっていた。

幕末には人口百三十万を誇ったこの町も、廃藩置県の頃には半数以下に減っていた。江戸に詰めていた藩士らが去ったため

で、大名屋敷は住む人もなく、狐狸の巣くう廃屋と化していた。取り壊された武家屋敷の跡には、茶や桑が植えられていった。

東叡山寛永寺の大伽藍も、彰義隊と官軍の戦いで大半が焼け落ち、寺領のほとんどが召し上げられた。富岡八幡宮の別当寺永代寺も、かつては三月の山開きに境内を開放し、池の両岸の築山（つきやま）に咲き乱れた、赤い躑躅（つつじ）や白い辛夷（こぶし）に、江戸の庶民も感嘆したものだが、廃寺となって無粋な公園にされてしまった。東側にあった深川三十三間堂も、通し矢で人気を誇っていたが、仏式の火葬をやめて土葬にせよとのお達しにより、神葬祭地に指定されて、あえなく取り壊されてしまった。

大川沿いにあった御竹蔵は、周囲に掘割を巡らし、舟で米俵を運び込んだものだが、今や陸軍省の倉庫に変わっていた。

榊原越中守（さかきばらえっちゅうのかみ）の別邸があった越中島も、徴兵された庶民の練兵場になっていた。西洋式の洋館が建ち始め、馬車が我が物顔に走る脇を、ガス燈が照らし出したのも、つい最近のことである。

　とはいっても、文明開化の恩恵に浴しているのは、華族や豪商など一部の階層に限られた。士族は帯刀を禁じられたが、平民の多くはまだ髷（まげ）を結い、お天道さまに従って寝起きしていた。町並みも習俗も新旧が入り乱れて、調和した美しさは失われてしまった。異なる時代と文化が、隣り合わせている有様だった。ただ、庶民にとっては、日々の生活は大して変わらず、宵越しの金は持たない長屋住まいの棒手振りは、まだ薄暗い時分から天秤棒を担いで、青物や魚の市場（いちば）に出かけていった。

　一人前の仏師になった幸吉は、まだ床の中にいた。二間しかない家の襖（ふすま）を隔てた向こうには、義母のお悦が眠っていた。遠くで雄鶏が鳴く声がしたが、どこにいるのかも分からない夢見心地だった。

　あれは文久三年、幸吉が高村東雲に入門してほどない頃だった。兄弟子の政吉に連れられて、本所五ツ目にある五百羅漢寺を、初めて訪れたときのことだった。掘割に沿って進むと、新田に囲まれた羅漢寺の伽藍が見えてきた。元禄の頃に松雲元慶（しょううんげんけい）禅師が建てた大寺院で、公方（くぼう）さまの寄進で隆盛を誇っていた。本尊釈迦如来を祀（まつ）った本堂の左右には、禅師が彫られた五百体の羅漢像が、客席から参拝者を見下ろす形で並べられていた。

ただ、東西の羅漢堂は安政の大地震で倒壊し、中に入ることができなかった。

　幸吉が冴えない顔をしていると、政吉は小走りで進み出て、左方にある二層の堂宇を指さした。こちらも屋根が歪んで、瓦がずり落ちそうになっていたが、大きな損傷はないように見えた。

「おめえに見せてえもんがあるんだ」

　三匝堂（さんそうどう）という建物に入ると、本尊の白衣観音（びゃくえかんのん）などが祀ってあった。履き物を脱いで上がると、左から螺旋状（らせんじょう）に坂道になっている。

「ぐるぐる巡って上っていくんだ。巻き貝の殻みてえだから、栄螺堂（さざえどう）って呼ばれてるんだ」

　幸吉は延々と並ぶ観音像に目を見張った。親や子供の追善供養に納めたもので、目鼻立ちの尊さ、宝冠の繊細な作り、金箔の輝き、衣の襞（ひだ）の具合も、江戸の仏師が、手間暇を惜しまず、腕を競い合ったもので、同じように見えても、平凡な作りのものは一つとしてなかった。一階が秩父札所観音、二階が坂東札所観音、外から見ると二層に見えたが、三階には西国札所観音が祀られていた。

「お釈迦さまは、天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）っておっしゃって産まれたっていうが、ここの観音さまは、どれも自分が一番だって顔、なさってるじゃねえか。それは仏師が最上の物を彫り上げて、奉納したからなんだよ。ここに来れば、江戸の名工の腕が拝めるわけだから、学び取れることは無限にあるってことさ」

政吉の話を聞きながら、参詣道を上っていくと、いきなり楼上の見晴台に出た。周囲に広がる新田の稲は、彼方まで続いている。かつてここも遠浅の海で、五百羅漢寺が建てられた頃は、すぐ目の前が江戸の海だった。さながら海上にそそり立つ霊山のように見えたことだろう。

「新田が次々に開かれていったから、海はどんどん遠ざかっていったんだ。でも、青々とした稲が風になびくさまを見てみろ。海面に立つさざ波みてえじゃねえか」

遠い海岸線のさらに先に、富士山が霞んで見えた。涼しい風が吹き上がってきた。新田の間に生える松の木立に、鳶が止まっていたが、ピーヒョロロと鳴きながら、稲の海を見下ろしている。

こんな素晴らしい所があったのかと、弟子入してほどない幸吉は思った。参詣道は二重の螺旋となっているから、上りと下りの参拝者がぶつかることもない。こんな奇天烈（きてれつ）な建物を考えるなんて、とても人間業とは思えなかった。それから幸吉は、師匠の許しを得た日には、お上さんに握り飯を作ってもらい、日がな一日、栄螺堂の観音像を見て回ったものだ。とりわけ、松雲元慶禅師が彫った観音像は、目をつぶっても見えるほど、頭の中に叩き込んだ。

幸吉は朝飯をかき込んでいた。お悦が炊いてくれたご飯に納豆をかけ、味噌汁をすすって沢庵をつまむのが、何よりのごちそうだった。温かいご飯が食べられるのは、朝だけだからだ。

豪快な食べっぷりを、お悦は箸を止めて眺めてしまう。何でもずけずけ言うのが災いして、婚期を逸したお悦にとって、まさか腹を痛めずにこんな息子ができるとは、勿怪(もっけ)の幸いとしか思えなかった。

お悦の弟である藤次郎は、建長寺の羅漢像の造像に携わったことで、高村東雲として名を轟(とどろ)かせていた。十二の年に弟子入した幸吉は、明治七年三月、年季が明けた後に、師東雲の一字を授かり、光雲と名乗るようになった。とはいっても、一日一分(いちぶ)の給金をもらって、浅草寺にほど近い、駒形の店で働き続けていたから、顔見知りには依然として、幸吉の名で呼ばれていた。

その年の九月に、徴兵検査を受けることになった。家の跡継

ぎは兵役が免除されたことから、腕を見込んだ師の東雲は、独身を通した姉お悦の養子として、幸吉を高村家に迎え入れたのだった。

食事を済ますと、堀田原(ほったはら)の家からすぐ先の駒形の店に向かうのだが、お悦は火打ち石で幸吉に切り火を打ちかけると、きりっとした声で「今日も気張っておいき」と言うのだった。実の母お増(ます)と比べて、若く見える威勢のいい義母ができたことが、頼もしくてならない。自分が師匠の身内として認められたことが、幸吉は何よりもうれしかった。

その日、師の東雲は政吉を連れて、山の手の方に出かけていった。皇城(こうじょう)の門の多くが撤去され、下町との行き来がしやす

くなったから、昼過ぎには戻れるだろうということだった。幸吉は店先で木寄師（きよせし）が切り出した檜（ひのき）から、槌（つち）で鑿（のみ）を叩いて大まかな形を切り出していた。細心の注意を要するもので、出来上がった観音像を思い浮かべ、木の中から迎え入れる気持ちで彫らなければいけない。大黒天、蛭子（えびす）、不動尊の順に習熟し、ようやく菩薩も彫れるようになってきた。お顔の微妙な具合で、慈悲の心が表せるようになるには、仏師も悟りの何たるかを知る必要がある。

　仕事を始めたときには、ホトトギスも鳴いていたが、日が高くなるにつれ、裏手の米蔵でアブラゼミが騒ぎ出した。手ぬぐいで額の汗をふき、団扇（うちわ）であおいだが、店先に吊した風鈴はチリンとも音を立てない。お上さんが煎（い）れてくれた茶をぐいと飲

み干すと、余計に汗は出てきたが、炎天で気が遠くなりそうだったのが、目が覚めたようにすきっとした。

　茶碗を台に置いたとき、見知らぬ老人が立って、店の中を覗いている。急用でもあるのか、そそくさとした様子である。

「師匠はおいでかね」

「あいにく、山の手の方に出かけておりまして」

「そうか、惜しいことだな……」

　老人は上を向くと、黙って立ち去ろうとしたので、幸吉はあわてて、用件についてうかがいたいと申し出た。

「実は、羅漢寺の栄螺堂が取り壊されることになったんだよ。何でも神葬祭地にするってお達しがあってな。祀られてた百観音も、下金屋（したがねや）に二束三文で売られてしまったんだ。金箔を取る

ためとか言っていたが、罰当たりな奴らだな。江戸の仏師が腕によりをかけた逸品が揃っていたのに。舟に積んで枕橋に持って行ってしまったとか」

　話を聞くにつれて、幸吉は血の気が引いていくのを感じた。あの栄螺堂が、夢の世界を巡るような栄螺堂が、取り壊されてしまうだなんて、そんなことが許されるのだろうか。奉納した人々の祈りと願いが込められ、学ぶことが限りなくあった百観音、何度見て回っても、新たに気づかされることがあった観音像が、罪人のように縛り上げられ、刑場に運ばれていくさまが見えた。幸吉は目尻が潤んでくるのを辛うじて耐えた。

　老人は話を終えると、幸吉を気遣うように覗き込んで、ため息をついて立ち去った。後ろ姿を見送りながら、何をすべきか

考えた。とにかく、師の東雲に知らせなければいけない。師匠が枕橋に来られるまでは、観音像を何としても守らなければ。

　彫りかけの木像を店に戻すと、お上さんに事情を話して言伝を頼み、店を空ける許しを請うた。自分に一体何ができるだろうか。こんな大事なときに、どうして政吉さんもいないんだと思った。

「分かったから、早くお行き」

　一礼すると、首に手ぬぐいを引っかけたまま、吾妻橋（あずまばし）に向かって走り出した。大川は真夏の光を受けて、水面が泡立つ星のように輝いていた。浅草寺に参詣する人々が、木の橋を渡ってくる。着飾った商家の娘が、女中を供に連れている。川岸から子供が釣り糸を垂れている。いつもと何も変わらぬ風景が広が

っているのに……。老人の話が悪い夢であってくれればと願わずにはいられなかった。ただ、神仏判然令が出て以来、神社の境内にあった別当寺は取り壊されて、仏像や経文が打ち捨てられたという話は聞いている。

延暦寺(えんりゃくじ)の一部だった日吉山王社(ひえさんのうしゃ)では、神官と農民が仏像や仏具、経文を焼き払い、焼け棒杭(やけぼっくい)となった像が、晒し者(さらしもの)にされたという。栄螺堂の観音像も、今頃は炎の中に投げ込まれているのではないか。観音さまが生きながらにして、火あぶりにされるさまが目に見えた。表情を変えることなく、すさんだ世を哀れむように見つめていたが、金箔が溶け出して真っ黒な炭と化していく。

吾妻橋を渡ると、八百松から右に入った川沿い、枕橋のたもとに下金屋はあった。御三家水戸さまのお屋敷である。炭俵に詰められ、荒縄で縛られた観音像が、小舟から上げられると、職人が無造作に投げ渡し、庭の片隅に積んでいった。

幸吉は中に入ってかがむと、炭俵の端から飛び出した観音像を見た。無理に詰め込まれたせいで、手や足が折れたり、宝冠や台座が外れてしまっている。

炭俵を手渡された職人は、うさんくさそうに幸吉を見た。小舟に乗っていた親方は上がってくると、幸吉を睨みつけて追い払おうとした。

「これは羅漢寺の百観音ですね。ちょっと見せていただけませ

んか。とにかく、二、三体でもいいので……」
「いじくられちゃ、仕事にならねえんだ」
親方は迷惑そうに舌打ちしたが、ここで引き下がるわけにはいかない。
「どうしても、取っておきたい観音像があるんです」
幸吉が平身低頭で頼んだので、見るだけならいいということになった。炭俵の中にある観音像をすべて点検し、特に技巧が優れている物や、破損の少ない物を取り分けておき、その中から師の東雲に買い取ってもらおうと考えたからだ。
　職人たちは縁側に腰掛けて、茶を飲んでは一服していた。幸吉は炭俵を開けて、一体ずつ観音像を調べていった。ある物は美しいお顔をしているのに、手足が折れてしまっていた。ある

物は無事だったけれども、他の観音像と比べると、技巧の上で劣っていた。数体を選びだそうと思っていたが、どうしたらいいか判断がつきかねた。額から汗が垂れていった。
「まだ終わらねえのかい」
「あと一時（いっとき）ほど待っていただけませんか」
「そんな悠長なことしてたら、日が暮れちまう。これから火の中に突っ込むんだから。おい、そろそろ仕事にかかろうじゃねえか」
「そう言わずに、ここに取り分けた分だけでも、手をつけずにおいて下さい」
　押し問答していると、大川沿いを曲がって、小走りでやってくる顎髭（あごひげ）の姿が目に入った。師の東雲に違いなかった。職人た

ちもそちらに目を向けた。
「幸吉、よくやってくれた！　俺も心配になって飛んできたんだ」
　東雲はいつになく、口許に笑みを浮かべている。腋（わき）に道具箱を抱えながら、手前に並べられた観音像と、まだ炭俵に詰め込まれた物を見回すと、親方に対して丁重に一礼した。職人たちも手ぬぐいで汗をふきながら頭を下げた。どうやら師匠とは顔見知りだったと見える。
「羅漢寺の観音像の中で、数体買い求めたいものがあってな」
「へえ、先ほどからお弟子さんが、選（え）り出してましたよ」
　親方は慇懃（いんぎん）に挨拶すると、小屋の方に下がっていった。算盤（そろばん）でも取り出して、皮算用でもしているんだろう。東雲は道具箱

を台の上に置くと、その場にかがんで、幸吉が取り分けた観音像を、一体ずつ手に取っていった。これは誰それの作だ、台座だけなら取りつけられる、まあ、これも悪くないがと、独り言を言っている。幸吉は背後から師の横顔を見ていた。先ほどとは異なり、仕事をしている時の厳しい表情に戻っている。
　算盤を手にした親方がやって来た。師の東雲は顔をこわばらせたまま、炭俵の中の物をすべて見させてくれと言った。親方は今、茶を持ってこさせますからと答えた。幸吉が頼んだときとは、随分応対が違うではないか。
　師匠が指さしたので、幸吉はまだ荒縄で縛ったままの炭俵を開けた。一体ずつ東雲の前に並べていった。
「ああ、惜しいことをした……」

取り出された観音像は、手足がすべて折れて、顔にも傷がついていた。宝冠が外れただけの像は、どこに行ってしまったのか。次の炭俵を開けたとき、幸吉は息を呑んだ。羅漢寺を創建した松雲元慶禅師の作だった。目許の美しさと、柔和な表情、衣の襞の具合も抜きん出ている。取り出した観音像を、東雲に差し出すと、両手で胴の辺りを支えながら大きくうなずき、良かったとだけつぶやくと、幸吉の顔を見上げてほほ笑んだ。

　とりあえず、買い求めたい観音像は決まった。師の東雲が手を挙げると、親方がにんまりした表情で近づいてきた。この五体を求めたいがと言うと、親方は算盤をはじき出した。

「締めて一両三分二朱（さんぶにしゅ）ということで」

「高いな」

「観音さまですので」

　師の東雲は呆れた表情で、幸吉の方を向いて苦笑した。もう少し負けろと、言い出せなくなってしまった。

「その代わりに、親方にお願いがあるんだ。残りの観音像は火にくべて、金（きん）を取るんだろう？　その前に観音像の玉眼（ぎょくがん）を取らせてもらいたいんだ。玉眼には御仏の魂が宿っていてな。このまま焼かれては、余りにもおいたわしいので」

「そうですか。仏に祟られちゃ商売あがったりだ」

　冷めてしまった茶を、ぐいと飲み干した。支払いを済ませると、買い取った五体の観音像は、下金屋で借りた荷車に載せていった。東雲は道具箱の蓋を開けると、鏨と槌を取り出した。幸吉はようやく、師匠が箱を持ってきたわけが分かった。東雲

は合掌して、南無観世音菩薩と唱えると、継ぎ目に鑿を当てて槌で叩き、玉眼と白毫（びゃくごう）を取り出した。幸吉は取り出された水晶の眼に手を合わせた。

「玉眼に仏さまの魂が宿ってるっていうのは本当ですか」

東雲は口を固く閉じて笑いをこらえている。こちらの言うことは、何でも真に受けるところが、幸吉の良いところではあるのだが。

「俺は坊主じゃねえから、そんなこと知らねえよ」

それから幸吉も、観音像に祈りを捧げると、継ぎ目に鑿を当てて、玉眼と白毫を次々に外していった。これらの像を造った仏師も、まさか自分が彫り上げた観音が、こんな仕打ちを受けるとは思わなかっただろう。これを奉納した人々はどんな思い

がするだろう。胸が締めつけられるのに耐えて、継ぎ目に鑿を当てていった。抜き出した水晶は、これから彫り上げる仏像にはめ込むことで、炎にくべられる観音さまの魂だけは、救われるんだと自らに言い聞かせて。

荷車に載せた五体の観音像を、幸吉は店に運び込んだ。玉眼と白毫が入った道具箱は、師の東雲が抱えてきた。この騒動で二人とも昼飯を食べ損なっていた。とりあえず、銭湯で汗を流してから、早めの夕食を取ることになった。堀田原のお悦もやって来ていた。師匠の姉に当たるので、お上さんも気を遣っているのだ。

まだ、お天道さまが西に出ていたが、普段は朝にしか炊かな

いご飯を、お上さんは炊いていた。座敷には夕食が並べられている。箱膳の上には、鰻の蒲焼き丼と野菜の煮付けが載っていた。師匠と幸吉の膳の上には、お昼のおかずだった八杯豆腐（はちはいどうふ）も載っていた。これは醤油と酒で煮込んだ料理である。
「皆そろったみたいだな」と師匠が声をかけた。お悦はお椀に鰻の肝のお吸い物を入れて、まず、師匠である弟の膳に置いた。
「藤次郎、ご苦労様だったね。鰻は政吉にさばいてもらったんだよ。わたしゃぬるぬるしたのが苦手でね。お汁をちょっと飲んでみなよ。度肝を抜かれるおいしさだから」
本来なら、次は政吉にお椀を渡すのだが、今日は先に幸吉に渡した。いかにもご満悦といった笑みを浮かべて。
「幸吉、今日は本当にお手柄だったね。おまえが機転を利かせ

てくれなかったら、今頃はあの観音さまも焼け棒杭になってるところだった。近頃は日増しに腕を上げてきてるっていうじゃないか。この子を見込んだ藤次郎の目に狂いはなかったね」
幸吉は決まり悪そうに、兄弟子に頭を下げた。すると、負けず嫌いの政吉は、次いで受け取りながらも、兄貴風を吹かさずにはいられなかった。
「こいつには世話を焼かされましたからねえ。羅漢寺に初めて連れていってやったのは、こいつがこんな背丈の頃でしたかね」
手柄を幸吉に持っていかれたと思っていても、それをおくびにも出そうとしない。その気持ちが幸吉にも痛いほど分かる。
お上さんは席についても、ほとんど口をきかない。義姉（あね）のお悦が来ているときは、裏方に徹している。何でも若い頃は、大

名屋敷に奉公していたそうだ。ただ、正月の時だけは特別で、得意の長唄を皆の前で披露していた。師の東雲は一人前となった人間は、芸事の一つは覚えた方がいいと言い、幸吉にも何かやれと勧めるのだが、実父の兼松には、芸事は一切まかりならぬと言い聞かされてきたから、何をすればいいか一向に見当がつかなかった。

ようやくお汁が全員に配られると、お上さんは師匠との間にできた栄吉坊ちゃんに、箸の持ち方を教えている。浅草の雷門が焼けた年に産まれたから、今年は数えで十一になる。将来はこの店を引き継ぐことになるはずだが。

食事の間は口をきくなというのが、士族の習いだそうだが、高村家ではなごやかに話すことが良いとされる。師と弟子の間

であっても、この時は分け隔てなく、思いを述べることができる。師の東雲は百観音の一部を助けられたのが、余程うれしかったのだろう、自身で徳利を持ってきて、政吉に続いて、幸吉にも注いでいった。栄螺堂の話を聞いた時は、胸が引き裂かれるほど嘆き悲しみ、下金屋と交渉する時は、命を賭けて守ろうと奮迅したのだが、それが今の喜びにつながっているのだ。幸吉は楽しそうに談笑する人々を見て、これが自分の家族なんだと、改めて思った。

食事を終えて日が暮れると、兄弟子の政吉は帰っていった。お悦も帰ろうとすると、東雲は「姉さんも泊まっていけよ」と引き留めた。どうやら幸吉と話があるので、一人で帰すわけに

はいかないらしい。お悦は察したのか、奥の座敷に蒲団を敷きに行った。
　師匠の部屋に呼び出された幸吉は、自分も話したいことがあったので、ちょうど良い機会だと思った。部屋には行灯（あんどん）の明かりがぼんやりともり、虫遣（むしや）りの煙が漂っていた。東雲が煙管（きせる）に火をつけると、座敷の中は霧がかかったようになった。光雲と名乗るようになってから、こうして師匠と薄明かりの中で話すのは、久し振りのことだった。
　神妙な顔で前に座った幸吉に、東雲は「そんなに固くなることはない」と言うと、煙草盆に煙管を置き、少し開けていた障子を閉めた。一度きちんとお前に話しておいた方がいいと考えてな、と切り出した。

「俺も天命を知る年となった。人生五十年、いつ死んでもおかしくない。もし俺に何かあったら、政吉に店を任せることにする。俺はおまえを見込んでいるが、だからこそ、この店に縛り付けておくわけにはいかないんだ。おまえには自分の道を進んでもらいたい。それができるのが、幸吉、おまえなんだ。ただ、心配なのは栄吉のことだ。まだあどけなさが残るあいつを、一人前の職人に育てるだけの時が、俺には残されていねえ気がしてな。だから、栄吉が悩んで何か言ってきたら、話を聞いてやってほしいんだ」
　幸吉は御尤（ごもっと）もだと言うように、何度もうなずいた。ただ、師匠がおっしゃりたいのは、それだけだろうか。今日の出来事に関して、本音をぶちまけたいと、思ってらっしゃるんじゃな

いか。東雲は口許に笑みを浮かべながら、幸吉の顔をしみじみと眺めた。そして、身をかがめると、小声で話しだした。
「俺はご公儀が瓦解してこのかた、世の中が狂っちまったと思ってるんだ。異人が大きい顔してのさばって、何をするんでも異人の物真似ばかりするようになった。俺が好きだった江戸の町、季節の折節に花や月を愛（め）でたり、神社仏閣の御祭礼で、人々の笑いが絶えなかった江戸の町はどこに行っちまったんだ。お城に付け火をしたり、やたらに人を斬った連中が華族さまとは、恐れ入谷の鬼子母神だ。この日の本は、聖徳太子の頃から、神と仏が支え合って護ってこられた国だ。それを神仏を区別しろなんて、わけの分からねえお達し出すもんだから、日本中の寺院が打ち壊されて、仏像や経文が焼き捨てられた。それまで

有り難がってた物をだぞ。罰（ばち）が当たるとかいう以前に、人倫に悖（もと）るってことが、どうして分からなくなっちまったのか。俺たち仏師は、おかげで食い上げだ。人心が荒廃したのを映すように、江戸の町は虫食いみてえに荒れ果てて、多くの人が逃げ出していった。これがご維新ってものかい？　俺にはどうしてもそう思えねえ。この国は異人に乗っ取られちまったのさ」
　東雲はすかっとしたように、腕を上に伸ばすと、消えてしまった煙管に、また煙草を詰めている。火をつけ直して大きく吸うと、ほっとしたように息をついた。
「この国はどうなっていくんでしょうか」
「それはおまえたちが決めていくことだ。四民平等だそうだからな。忘れちゃいけねえのは、日本人としての誇りってものを、

取り戻せるかだよ。おまえたちの肩に、この国の運命はかかってるんだから。ただ、今日のおまえの働きを見て感じたんだが、百観音の五体だけでも、助けられたってことは、一縷（いちる）の光のように思えてな」
　幸吉はそのとき、師匠に話したいことを口に出すのは、今だと思った。両手をついて頭を上げると、東雲の顔を仰ぎ見た。
「お願いがございます。五体の観音のうち一体を、私に譲っていただけないでしょうか」
「それは……」
「松雲元慶禅師が彫られたものでございます」
　東雲は意表を突かれたように、身構えると黙り込んだ。五体のうちで最も美しい観音像で、それを手に取った時の師匠の喜

びは、幸吉にもありありと感じられた。それだけは譲れないと、思ってらっしゃるんだろう。半ばあきらめかけた時だ。
「分かった。五体の観音像を助け出したのはおまえだ。手元に置いて祀りたいというならよかろう」
「おいくらで……」
「商（あきな）いじゃねえんだから、一分二朱でいいよ」
　そのとき、襖の向こうから、お悦の甲高い声が聞こえた。まさか立ち聞きしていたわけではないだろうが。
「いつまで夜更かししてるんだろうね。早く寝ないと明日の仕事に障（さわ）るよ」
　師匠の部屋を退出する前に、幸吉は改めて両手を突くと、東雲の顔を仰いで誓った。

「お譲りいただける観音を、守り本尊といたしまして、一層の修練を積む所存でございます」

「俺が教えられることは、みんなおまえに教えたから、あとは自分で道を見つけていくんだな。分かってるだろうが、師匠から学んだことだけやってる奴は、それだけだってことよ」

　松雲元慶禅師の観音像は、堀田原の家に持ち帰った。床の間もないので、自分の部屋の片隅に祀ることにした。ただ、今回の受難も身に金箔をまとっていたからだと思うと、いっそ木地を出してしまった方が、観音さまもお喜びになるのではと思った。

　水につけておくと、金箔とともに漆（うるし）や膠（にかわ）もはがれてしまっ

たので、乾かしてから元のように貼り合わせた。禅師が彫られたままの木像が姿を現した。これこそ、菩薩として修行をされているお姿だと思った。

　それからは、朝起きたときと床につくときには両手を合わせ、仏師としての腕を上げられるように、進むべき道へ導いて下さるように祈った。幸吉が駒形の店に出かけている間に、お悦が花や菓子を供えてくれた。義母のさりげない心遣いが、有り難くてならなかった。

　師の東雲は、江戸の仏師の技を受け継いだ貴重な存在で、その許で修業できたことは、身に余る幸せであったが、その先をどう進むべきかが大きな課題だった。師匠にとって、異国の文化に侵されていく東京は、目を覆いたくなる惨状に映ったのか

もしれない。ただ、西洋人が来たことで、学べることもあるに違いない。欧米の彫刻を見て感じたことは、写実を重んじているということだ。江戸の仏師の技は、伝統として引き継がれてきたが、すでに形式として確立したものを、守り続けてきた嫌いがある。

その一方で、鎌倉時代の運慶や快慶は、人間の体の動きから観察したことを、仏像を彫る際に取り入れていった。写実によって、伝統を受け継ぐだけではなく、自身の魂を注ぎ込める、新しい彫刻が生み出せるのではないか。

幸吉は今、できることは何かと考えた。松雲元慶禅師の観音像に引けを取らない、完璧な像を彫り上げることだろう。それに百観音から抜き出した玉眼と白毫を埋め込み、火にくべられて失われたお体を、取り戻して差し上げることだ。

明治十年、幸吉は内国勧業博覧会に、師東雲の代作として「白衣観音」を出品して、最高賞を受賞した。この作品によって、名実ともに彫刻家、高村光雲は誕生した。

あとがき

これは彫刻家高村光雲が、明治初期の廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）で五百羅漢寺栄螺堂（さざえどう）の観音像が火中に投じられるところを、救い出した逸話に基づいている。当時の光雲は、仏師高村東雲に弟子入し、幸吉の名で呼ばれていた。高村姓を名乗るようになったのは、せっかく磨き上げた腕が、兵役で空に帰すのを惜しんだ師の配慮からだった。

　幕末から明治初期の出来事を、光雲は『幕末維新回顧談』の中で詳しく述べている。この物語もそこで語られた回想に基づいている。また、幕末の江戸と周辺の地誌に関しては、斎藤幸雄・幸孝・幸成の『江戸名所図会』が、明治初期の東京の街並

みに関しては、当時の古地図が参考になった。

二〇二三年二月五日

高野敦志